



TITLE:

趣旨説明 世界のジャスティス --地域の揺らぎが未来を照らす--

AUTHOR(S):

谷川, 竜一

CITATION:

谷川, 竜一. 趣旨説明 世界のジャスティス --地域の揺らぎが未来を照らす--. CIAS discussion paper No.50: 世界のジャスティス --地域の揺らぎが未来を照らす-- 2015, 50: 1-4

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228629>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

趣旨説明「世界のジャスティス」

—地域の揺らぎが未来を照らす—

谷川 竜一

京都大学地域研究統合情報センター・助教

1. 湧出する叡智を汲み取る

「世界のジャスティス」、この一見奇妙なタイトルで、2014年4月に地域研の共同研究ワークショップは開催された。タイトルに、善・悪や正・不正といった二項対立の議論を想起させる「正義」という単語ではなく、あえて「ジャスティス」という言葉を選んだのは、私たちの持っている価値観の枠組みを一端取り外し、多様性のもとで共存や調和を導く叡智のメカニズム—それがたとえ既存の価値観では不正義であったとしても—についての議論を目指したからである。

多くの人にとって、テレビの画面から聞こえてくる正義の叫び声の内容にとまどう、あるいはインターネットのニュースに、どこかの誰かが正義感たっぷりの態度で、過激でグロテスクなコメントをつける光景にうろたえる、そうしたことは日常茶飯事と思われる。正義のあり方や、その表出の仕方は多様にあることは頭では分かっているが、やはりショックは大きい。加えて正義は、どこかで網羅的にリスト化されているわけではなく、言葉で理論的に教えられるものもあれば、経験的に学び取っていくものでもある。伝承や映画、マンガの主人公の行動を通して、擬似的に身につけていくこともあるだろう。そんな様々な正義が、グローバル化の中で人々が激しく動くことになって、衝突したり、共振したりしているのである。

進展するグローバル化の中で、人々が自由に移動して異なる意見の人に出会うことは、異文化理解や自己発見へ至るものとして、一般的には好意的に受け止められている。しかし幸福なはずの出会いの中で、先のようにお互いの価値観や規範、あるいは美学や個人の哲学が日々先鋭化し、衝突するニュースを聞かない日はない。そうした課題を乗り越えるために必要な他者の理解や自己発見は、学問的にもチャレンジングであり、辿り着くべき理想の終着地として私たちは語ってきたと思う。だが、そうした理解や発見を長い道のりの果ての目標に据えたとしても、ひとまずは異なるも

の同士の共存やすれ違いを、あるいはギリギリの調整と妥協に至るプロセスを、平和裡に進めることもまた、現実的で重要なことではないだろうか。

では、その手がかりは一体どこにあるのだろうか。仮にグローバル化のなか、様々な地域の正義が噴出することで衝突やそのリスクが生まれているのであれば、様々な地域で機能していた、あるいは眠っていた共存や調和の叡智もまた、同時に湧き出していると考えられるのではないか。そうだとすれば、衝突だけに目を向けるべきではない。そこで湧き出ている叡智—衝突を最小限に抑えて共存を導いていくための地域の叡智を、汲み取ることに挑戦すべきだ。課題がグローバル化するとき、同様に可能性もグローバル化して開かれうると私は考えたい。そしてその適任者こそ、地域に深く入り込んでいく地域研究者であろう。

以上のような企画意図のもと、2013年の秋以降に地域研の数名で議論を重ねてきた。そしてワークショップでは、そういった叡智が働くメカニズムを、私たち一人ひとりが学びうる外部世界のジャスティスの現場として、報告することとした。

2. ワークショップにおける発表

ワークショップでは5つの発表の後、3人のコメンテーターからコメントを頂き、その後総合討議を行った。簡単にそれらをここで紹介しておきたい。

最初の発表は、アフリカ・カメルーンの都市と農村を結んで繰り広げられる首長制社会の断面を論じた平野発表である。バングラップと呼ばれる農村地域の首長が亡くなったことを契機にして後継者選びが始まるが、そこに同地域出身だけれども現在は都市に住む貴族たちが割って入ってくる。ただし、その選択に対して彼らは完全に自由に振る舞うのではない。というのも、彼らは自らの都市における成功を都市の同郷者コミュニティや故郷の人びとに承認してもらいたいからだ。一方で、

農村側も都市に住む貴族に村にお金を流してもらうのは重要であり、そうやって宮廷や首長制社会の運営をしている側面がある。そして最終的にバングラuppの首長は都市側の意見が強く働いて決定されることとなったが、このことはバングラuppという農村地域とそこ出身の人々が住む都市の共存関係を意味している、というものである。

ここで興味深いことは、都市の論理と農村の論理が合致するというコンテキストでこの発表が構成されているのではなく、都市が農村的なもので構成されており、農村が都市的なもので構成されているという、入れ子のような構造にまで踏み込んでいる点である。単純に都市が農村を都合よく扱っているという話ではなく、実はどちらが勝っているか分からない、もしかすると農村が都市を静かに御しているような話にも聞こえるかもしれない。

次は2004年の大津波後のインドネシア・アチェで生きる人々を対象とした西発表である。

国際社会からの支援者たちが、悲しみに暮れるアチェの人々を想定して現地入りする中で、思いのほか笑顔があったり、明るい表情があったりして戸惑ったという経験の紹介から話が始まる。続いてアチェという地域の被災前の姿を紐解くなかで、内戦のせいでアチェの一般の人々が外部と繋がるのが遮断されていたり、個人レベルでもたえず内戦にまつわる政治的な色分けがついてまわるため、死者を弔うことすらままならなかったりした過去が紹介された。そこに津波が襲い、人々に自らの声を外部へと発する場所や機会がもたらされたのである。被災者たちは、旗を立て自らの生を表明し、あるいは来訪者に皮肉も交えながら現状を説明し、はたまた失った人々への弔いのために店を開くなど、思い思いの方法で外と繋がりながら、アチェという地域における死者と自らの生を再度定位しようとしているのである。西は、地域に入ってきた支援者たちの戸惑いこそ、私たちがこの地域をどのように理解しているのか、という他者と自己に向けられた問いの出発点だと述べる。「戸惑い」に他者や異文化との架橋の可能性を感じる視点が非常に印象的だ。

続く王発表では、タイに住む中国系ムスリムの人々の食生活が対象となった。王が特に興味を持っているのは、北タイという多民族状況の中で、移民としてやってきた中国系のムスリムたちが持つ食文化へのこだわりやそれを支える宗教規範と、その実践がもつ意味である。様々な民族が同じ場所にいるからといって、そこで民族どうしが相互

接触する機会が頻繁にあるかといえば、そうではない。民族というレベルや使用言語の違いが壁となっているのだと王は言う。そうしたなかで、中国系ムスリムたちが地域の食材などに応じてハイブリッドなメニューを生み出し、それを儀式の参加者に振る舞うが、そこにおいて個別に食事がなされるのではない。彼ら自身の伝統に則して、共食を行うのである。こうした場を通して、普段交流のないムスリムや、果ては仏教徒やそれ以外の人々など、多様な人々との接触や交流が実現している。

王発表で特徴的なのは、異文化の交流や調和を食事という身体行為において読み解いていることである。発表中に触れられていた、イスラームの死生観がハラール食品に結びついていることや、共食や喜捨という行為が伝統や教義に含まれていることは、宗教上の教えが、実際社会の具体的なものと振る舞いに転化していることを意味する。いわば抽象的な言葉の体系としての教義のなかに、他者との寛容な接触や、異文化の中で変容しながら生きていく具体的な作法が、あらかじめプログラムとして埋め込まれているとも見なすことができる。そのように、発表を聞きながら思いを巡らしたのは、私だけではないだろう。

さて、この次の星川発表は一転して科学の話題である。2011年にタイのバンコクで大きな洪水があったことは多くの人が記憶しているだろう。バンコクを氾濫水から守るために設置してあった土嚢の堤防が、逆に冠水状態を長期化させていたため、上流側の人々は撤去を望んでいた。しかしそれに対して下流側の人々は撤去に反対したため、対立が生じた。星川はこれを「氾濫水の押し付け合い」と評する。押し付け合いの背後には、都市中心部と郊外における主要政党間の政治的な対立が実はあることや、バンコク都を守ることと、結局周囲の田舎が置き去りにされるという不均衡に対する地域対立があることがまず指摘された。だが対立はこれにとどまらない。発表内でフォーカスされたのは、そもそも土嚢の堤防にバンコクを守る効果があるのか、といった科学的見解の対立があったことである。ここで星川が強調するのは、バンコク周辺が広い低地であり、水が流れるにしろ広がるにしろ、非常にゆっくりで、その行方が極めて分かりにくい自然地形上の問題だ。それに対して科学的な見解がいくつも出されたことで、互いに正しいと主張する選択肢が「多チャンネル化」したという。様々な人が考えを発信できる現代は、そうした多チャンネル化の時代

であり、星川も指摘するように価値を相対化すると無限の選択肢に絡め取られる危険性がある。もちろん、それに対して即効性をもつ回答はまだ誰も見出し得ていないが、発表の最後に展望として、各見解の妥当性を数値化するような試みが言及された。

最後の帯谷発表は、ウズベキスタンにおける女性のヴェールに関してであった。

そもそもウズベキスタンではムスリム人口が9割を占めるにもかかわらず、イスラーム・ヴェールが公的には「好ましくないもの」とされていたが、近年はヴェールのみならず、イスラーム・ファッションを身にまとった女性が飛躍的に増えているという。これを読み解くにはいくつかの問いを順に解いて行かねばならない。なぜイスラームの人口割合が極めて高いにもかかわらず、ヴェールが好ましくないものであったのか、近年になり女性たちの間で急速に流行しつつあるのか、というものだ。帯谷発表ではこれに対して視覚資料などを用いて歴史的に分析が加えられた。大まかな流れは以下のようなものだ。まず、社会主義国家の建設を行う上で、女性たちをイスラームからファッションも含めて引き離すことが重視され、そしてその政策は第二次大戦後にかけて「達成」されていった。加えてソ連が崩壊した後も、為政者たちがイスラーム・ヴェールの「根絶」を近代化として捉えるあまり、そうしたソ連時代の方向性は維持され続けた。しかし近年のグローバル化の中で、伝統主義者の復権が起こると同時に、彼らが民族的な価値観とほぼ一体化したイスラーム的な価値観を重視し、そうしたファッションを推奨するようになった。帯谷は今後、こうした状況を社会主義的な近代化と結びつけながら更に検討を加えていくと述べており、近代化との距離のもとで社会主義や伝統、宗教を再配置する議論のプラットフォームを探っている。

3. 充実したコメントと白熱した総合討論 —正義をめぐる議論は続く

5つの発表の後、コメントと総合討論を行った。コメンテーターは、2013年に『人生で大切なことは倫理の教科書に書いてあった』（宝島社）を上梓された河合塾の公民科講師・河合英次氏、南米をフィールドとして都市社会学を研究されている上智大学の幡谷則子氏、そして熱帯の公衆衛生を長く研究されてきた長崎大学の門司和彦氏の3名にお願いした。

各コメントの内容は、ここで要約するよりも、ぜひご一読願いたい。コメンテーターの方の意見は、それぞれのご専門やバックグラウンドがにじみ出ながら、同時に正義に対する考え方が反映された、極めて読み応えのあるものとなっている。ワークショップ全体の雰囲気や議論の行く末を知りたい方は、発表内容を飛ばして、コメント及び総合討論から読んで下さっても十分に興味深いはずである（もちろん発表も大変面白いのは間違いないが）。

特に発表において世界の様々な地域の驚くような面白い事例が出された上に、コメンテーターの方々の多彩な顔ぶれ、そして司会であった地域研の山本氏の議論の方向付けや切り返しもあり、議論は大いに白熱した。そして全員が磁力にひきつけられるように、普遍的な正義の有無など、正義自体の議論へと、議論は進んでいった。議論の中心が正義の共存・調和としてのジャスティスではなく、正義そのものへと移ったのは、共存や調和のメカニズムを分析者の視点で検討すること以上に、自らの立ち位置も含めた意味での正義の議論の方が魅力的であり、本質的であるからに違いない。

では、この議論の争点となった普遍的な正義とは、いったい何なのか、果たしてそれは存在するのか。それぞれの正義が普遍的な正義を主張し、それを調整しようとした場合、そこにはすでに矛盾が生じている。なぜなら、それは正義の複数性を認めた上で成立する議論であり、正義をローカルな次元へと落として考えることになる一つまりその正義を相対化してしまうものであるからだ。これは、普遍的な一つの正義を求める人々にとっては納得出来ないものである。だが一方で、そうした正義も、長い年月のなかで緩やかに変容してきた／いくこと、加えてその正義のロジックが成立するために時に外部に依存しているも事実である。例えばいくつかの発表のなかには、反目していたり無関係と思われがちな二者の間に実は交流や交通があること、しかも互いに強化しあったり、あるいはそうなることがあらかじめインプットされていたりする事実が紹介された。長い時間軸を設定すること、相反ないし無関係と思われる事実の繋がりを探ること、などの手法を採ることですぐにふん見方が変わるものである。こうした視点は現在の変容する社会を平和裏に調整し、他者と共存しながら、今後のグローバル社会の人々の生き方の有り様やそのデザインしていくヒントになるように思う。必要なことは、議論の先鋭化ではなく、議論を共有する足場や視座を作ることだ。今回の

イベントは、地域に深く分け入り、その土地の未来も真剣に考えている研究者たちの研究成果を提示し、その足場を提供する第一歩であったといえるだろう。

世界の様々な地域から、多様に存在する正義を調整するための叡智を抽出し、技法として提示してみるというテーマは、1回の集まりでは十分に達成できなかったかもしれないが、地域研のワークショップの醍醐味を存分に引き出したものになったように思う。地域研究と情報学を掛け算しながら、新たなテーマを設定し、同時にそこに全国の研究者が加わるプラットフォームを構築し、現在の地域研究をめぐる布置を一気に見渡しながら、その議論に参加することができることが、地域研の4月の共同研究ワークショップの魅力である。今年見逃した方は、次回ぜひご来場願いたい。

最後に、筆者ら企画者による説明不足を超えて、テーマの深淵にまで届くような言葉をなんとかして紡ごうとして下さった、発表者やコメンテーターの方々に、御礼申し上げたい。